

ロシア 東欧 経済速報

発行人 ロシア東欧貿易協会 東京都中央区新川1-2-12 金山ビル 郵便番号104 電話 (3551) 6215~9
ロシア東欧経済研究所 [購読料・送料共前納 1ヶ月—1,500円 1年—18,000円]

1997年(平成9年)8月25日 No. 1066

目次

カスピ海エネルギー開発に追い風は吹き始めたのか(2)	輪島実樹 1
新連載 ホームページ拝見(1) ロシア中央銀行	10
キーパーソン	11
ロシアで民族・連邦問題担当の副首相を任命 / 11	
統計速報	11
データフラッシュ / 11	
CIS諸国通貨の最新為替レート	11

カスピ海のエネルギー開発に追い風は吹き始めたのか(2)

はじめに

本号では前回に引き続き、カスピ海のエネルギー開発とその輸送問題に関するレポートの後編をお送りする。前回は既存ロシアルート利用の問題と新規の西回りルート開発における諸問題までを論じたが、今回は南回りルート開発問題、アゼルバイジャンの海底油床開発、カスピ海領有権問題を取り上げ、そのうえで若干の結論を述べる。

3. 意外に現実味のある南周りルート

北方のロシアを回避してカスピ海の資源を輸送する3つの選択肢のうち、イラン、あるいはアフガニスタンを経由する南周りルートは、①イランと米国の対立、②アフガニスタン内戦、という条件から、当面見通しが立たないルートであるとされてきた。イラン経由ペルシア湾へ、あるいはアフガニスタン・パキスタン経由でインド洋へ至るもので、図中10~14の各原油・ガスパイプラインルートがこれにあたる。イランと米国の対立は、この地域の資源開発が抱える最悪の矛盾である。ロシアの影響力の強い北周りの既存ルートを避けようとする米国が、外洋への最短コースであるイラン経由のルートもまた、否定するのである。西のコーカサスは既述のとおり地域対立が複雑であり、東周りは地理的に消費地まで余りに遠い。これでは、ロシアを経由しない新規ルートの建設は、事実上目処が立たない。